

【基調シンポジウム】リカバリー 期待・夢・現実

～精神障害者のリカバリーに付随して何が生起するか～

座長：高橋清久（財団法人精神・神経科学振興財団）

シンポジスト：大島巖（日本社会事業大学 NPO 法人地域精神保健福祉機構・コンボ）

伊藤順一郎（国立精神・神経医療研究センター/ NPO 法人地域精神保健福祉機構・コンボ）

宇田川健（NPO 法人地域精神保健福祉機構・コンボ）

指定発言者：寺尾直宏（NPO 法人千葉県精神障害者家族会連合会）

今年、基調講演を行わず、リカバリーについての基調シンポジウムを開催し、リカバリー全国フォーラムにきた会場の人に問題提起をしました。精神障害者のリカバリーについて、また精神保健サービスをリカバリー志向に変えるため、またリカバリーへの理解をお互いに共有するため、そして、そもそもリカバリーということを行うとき、病識がない場合の人もいるのだということをお話ししました。

大島さんはリカバリーを精神保健福祉士サービスの新しい支援目標に掲げる理由を挙げました。その中でリカバリー全国フォーラムが果たす基本的な役割と機能を3つの観点に整理しました。そして、リカバリー全国フォーラムが目指すものとそのプロセスを、図を用いて説明しました。3つの観点は、1. 当事者中心の精神保健福祉サービス（含・精神科病院）への改善、2. リカバリーとアンチスティグマを進める社会の価値・文化を創造する、3. 専門従事者、国民が自らのリカバリーを見つめ直し、リカバリーの価値を考え、受け入れるというものです。その結果、国民各層の理解・協力を得て精神障害を持つ人たちの自己実現とリカバリーを実現する、また車輪の両輪として、国民各層が精神障害を持つ人たちのリカバリーに共通認識を持つという2つのリカバリー全国フォーラムのゴールを示しました。

伊藤さんは「リカバリーとは旅のようであり、人と人とのかかわり合いの中から立ち現れるもので、いわばリカバリーという言葉は人生の回復と言える」とたとえを交えながらお話しされました。

宇田川さんは入院中に拘束された時に、コンボ宛に書いた手紙を読み上げ、「この時にも私はリカバリーした精神障害者でした」と言いました。またリカバリーは信号のついた交差点を自分の判断でわたるようなものだと言いました。

寺尾さんはリカバリーという言葉そのものが、精神疾患からの意識的な回復のプロセスをさすのではないかと指摘し、精神疾患ごとに自己管理能力が異なる場合があるので、リカバリーという言葉についていけない人もいるのだということ、本人の意志を制限せざるをえない場合も鑑みて、そこに配慮してリカバリーに関する定義や表現を検討する必要があると問題提起をしました。

《宇田川健（NPO 法人地域精神保健福祉機構・コンボ）》